
魔法少女リリカルなのはstrikers～黒き風を纏いし者～

十字架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは strikeress 黒き風を纏いし者

【NZコード】

N0929J

【作者名】

十字架

【あらすじ】

J・S 事件が終わり3月となり機動六課の試験運用期間が終わるうとしていた。

そんな中、新たに起きた一つのロストロギア事件。

事件の担当となる機動六課メンバー。

新しく六課に出向して来た懐かしき友人。

それは新たなる悲劇の始まりとなるのか。

魔法少女リリカルなのは *striker5* 黒き風を纏いし者

・・・始まります・・・

誠に勝手ながら、忙しくなり小説を書く時間が無くなってしまい、
更新を停止する事なりました、深くお詫びいたします。これまで読
んでいただいた方々ありがとうございました。

一話（前書き）

魔法少女リリカルなのはのファンファイクション（二次創作作品）です。原作キャラの口調や性格が少し変になるかもしれないのに原作キャラに思い入れが強い方は気を付けてください。

一話

新暦76年、3月15日

AM10:36

機動六課隊舎・部隊長室に茶色のショートカットの女性と30cm位の銀色のロングヘアの少女が仕事をしていた

？？？「今日も平和だと」です、ねはやてちやん

はやて「やうやなアリイン」

茶色のショートカットの女性・・・・・八神はやて、機動六課の部隊長。夜天の主。

30cm位の銀色のロングヘアの少女・・・・・リインフォース？（ツグアイ）、はやてのゴニゾンデバイス

ビィー・・・・・ビィー・・・・

緊急警報が鳴り響き辺りにアラートの文字が現れる

はやて「シャーリーどないしたんや？」

画面が現れ

シャーリー「八神部隊長、レリックの反応が出ました。それと同じ場所にもうひとつ別のロストロギア反応もあります。」

はやて「なんやてー場所はー?」

シヤーリー「場所は管理外世界」「レセプティー」です「

はやて「なのははちゃん、現場へスタートのみんなと行つてくれるか
? フロイドらやんとワイトニングのみんなは隊舎で出動待機しつ
てや」

画面に現れたのは栗毛色の髪をサイドポニーテールにした女性と金色のロングヘアの女性が現れた。

「了解」はさておき、「なぜか」はなぜか

栗毛色の髪をサイドボーテールにした女性・・・・・高町な
のは、時空管理局のエースオブエー、機動六課スターZ分隊隊長。

金色のロングヘアの女性・・・・・フュイト・テスター・ラツサ・
ハラオウン、心優しき金の閃光、機動六課ライトニング分隊隊長。

A 4x6 grid of 24 black dots, arranged in four rows and six columns.

・・・

～～同時刻～～

～管理外世界「レセプティイー」～

白いローブを着た男と藍色のローブを着た30cm位の小さな男
がいた

？？？1「ここに我らが求める物があるか？」

白いローブの男は眩き藍色のローブの男に聞く

？？？2「そうだ。」

？？？1「それなら参るとしよう」

白いローブの男がそう言つと二人は消えるようにその場を後にした。

・・・

～管理外世界「レセプティイー」砂漠地帯上空～

スターズ分隊のみんなとレコックと謎のロストロギアの捜索の為、
レセプティイーに来ていました。

なのは「こ辺にあると思ひナビ」

探しながら呟くと

スバル「こちらスターズ〇三、なのはさんレリックとロストロギア
を発見しました。」

なのは「わかつた。こちらスターズ〇一。ロングアーチへ、レリック
とロストロギアを発見封印の後回収します。ヴィータちゃんにも
連絡をお願い。」

シャーリー「こちらロングアーチ。了解」

ロングアーチに連絡して発見現場へ急ぐ

・・・・・

・・・・・

管理外世界「レセプティイー」砂漠地帯オアシス

私が現場に来たときにはスバルとティアナがレリックとロストロギアを封印作業をしていた。

ティアナ「なのはさん、レリックの封印は出来ましたがこっちのロストロギアは封印が出来ないんです。」

なのは「えっ！？なんで」

ティアナ「封印しようとすると魔力が吸い取られるんです。」

私は少し考え

なのは「わかった。そつちは私がやるから一人は先にレリックを運んで」

スバル「わかりました。」

二人に指示した後ロングアーチとの通信を開き

なのは「こちらスタートーズ01、ロングアーチヘレリックは封印してスバルとティアナが運んでいます。ロストロギアの方は封印処理が出来ないので私が直接運びます」

シャーリー「了解。気をつけてください。」

なのは「了解。」

ロングアーチとの通信を終え作業を始めた。

A 5x5 grid of 25 black dots, arranged in 5 rows and 5 columns. The dots are evenly spaced and form a perfect square pattern.

管理外世界「レセプティー」砂漠地帶上空

？？？「あの娘達が持っているのが旧き結晶なのか？」

白いロープを着た男が藍色のロープを着た30cm位の小さな男に聞く

？？？ 2 「ああもうだ

「なにがどうあぐ舞うのじゃよ。」

？？？「いや待て、お前は剣の方を奪えあちらは我に任せよ」

そう言うと藍色のローブの男は普通の男性位の体格になりスバル達の方へと飛び去った。

？？？「それなら任したぞ」

白いのローブの男は咳きなのはがいる方へと飛び去った。

A 5x5 grid of 25 black dots, arranged in 5 rows and 5 columns. The dots are evenly spaced and form a perfect square pattern.

管理外世界「レセプティイー」砂漠地帯オワシス

私がもう一度封印処理を試してみるとティアナからの通信が繋がる

ティアナ「…………なのせん…………すみません…………

・・レーベケを奪われました

なのは「え! どうしたの大丈夫! ?」

ティアナに状況を聞こうとした時

煌！

私のいる場所を中心に蒼い閃光が降り注いだ

レイジングハート「プロテクション」

レイジングハートが自動防御をしてくれたが爆風に吹き飛ばされる

なのは「何！？」

ロストロギアがあつた所には白いローブを身に纏つた男がいて剣型のロストロギアを引き抜こうとしていた

なのは「待つてそれに触らないで！！」

????「貴様には関係無い」

そう言つとこつちに手のひらを向け蒼い閃光を放つため光をためていく

????「死ぬ」

殺意を秘めた蒼き閃光を放とうとする。

????「シユワルベフリーゲン！」

弾！弾！弾！弾！

4発の赤き光を纏つた鉄球が男を襲う

斬！斬！斬！斬！

男は剣型のロストロギアを引き抜き全ての鉄球を真っ一いつにしていく

なのは「ありがとう…ヴィータちゃん」

ヴィータ「なのは」「何なんだ？」

なのは「分からぬいけどあれを取り返さなきや」

ヴィータ「ああ」

私とヴィータちゃんがそれぞれのデバイスを構えるが

？？？？「田的は果たした長居は無用だな」

男はそう呟くと足元に魔法陣が現れる

ヴィータ「逃がすか！」

ヴィータは自身のデバイス・・・グラーファイゼンを振り上げ
男へ突つ込む

？？？？「転移」

そう呟つと男は魔法陣の中へ消えていった

ヴィータ「ちくしょうー逃げやがった

なのは「仕方ないよ、ヴィータちゃん。一旦スバル達と合流して六課に
帰ろつ」

私達は六課へと帰還した

一話（後書き）

読んでいただきありがとうございました。少しでも早く更新が出来るように頑張ります。

3月17日

時空管理局戦艦「クラウディア」艦長室

俺は一昨日発生して六課が担当する事になつたロストロギア事件の話をするためクラウディアの艦長で友人でもあるクロノの所に来ていた

悠騎「クロノ、このロストロギアと男達の推定魔導士ランクは本當なのか?」

クロノ「ああ間違ひ無い」

悠騎「一人ともオーバーランク」

悠騎「なのは達の傷は確か完治してなかつたよな」

クロノ「まだ全力での戦闘は無理だろう

悠騎「それなら俺もなのは達と一緒に捜査したいんだが何とかしてくれないか?」

クロノ「六課はこの事件が終結するまで解散が延期になつたから入ることは出来るが

悠騎「何か問題でもあるのか?」

クロノ「あそこは高位の魔導士ランク持ちが多いから3ランクダウンでも上が納得するかが問題なんだ」

悠騎「それなら3ランクダウンでいい」+になつても問題ない」

クロノ「そんなにランクを下げても大丈夫なのか?」

悠騎「大丈夫だカートリッジの使用量を少し増やせば何とかなる。」

クロノ「それなら僕も上を何とかしよう。ただしリミッター解除は僕とカリムの一回になるとと思う気をつけろよ」

悠騎「ありがとう話をかけるな

クロノ「いいよ僕もなのは達が心配だったから」

悠騎「じゃあ明後日から六課に行くよ」

クロノ「わかつたはやてには連絡しておくよ」

クロノと握手して艦長室から出た。

・・・・・・・・・・・・

3月21日

六課隊舎部隊室

俺は六課の部隊室にいた

悠騎「本日より機動六課に出向してもおした水無森悠騎執務官です
よろしくお願いします」

はやて「久しづぶりやな悠騎君にちりかよひじゅつお願いします」

悠騎「本当久しづぶりだなと」
はやて「本日はアコマセ」

はやて「一人はフォワード陣と休憩中や」

悠騎「それなら少し訓練場借りていいか?」

はやて「いいよ」

悠騎「ありがと」

はやて「その前に」「ホールサインを決めとこか?」

悠騎「それじゃあ俺のホールサインはスカイリーで頼むよ」

はやて「決まりや」

悠騎「じゃ訓練場に行つてへるよ」

はやて「じゃまた後でな」

俺は部隊長室から出て訓練場に向かつた

・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・

（機動六課訓練場）

俺は訓練場で空間シユミレーターを市街地にセットしてガジェットアッテ型を10体ガジェットアッテ型を5体出す。そして手首につけているブレスレットに呼び掛ける

悠騎「クルス、バリアジャケットを頼む」

クルス「OKマイロード、バリアジャケットセッタアップ」

黒地のロングパンツと紺のインナーに黒のロングコートを纏う

悠騎「さてとやるか

右手の中指につけている指輪を前に出し

悠騎「ファンタム、ガンフォーム」

指輪は拳銃（ワ サーパ99）へと姿を変えた

悠騎「よし」

デバイスを片手にガジェットに向かつて走る

悠騎「ファンタム、バレットノーマル」

ファンタム「Yeos」

弾丸を選んでカートリッジを1発ロードする

ガジェット？型に向かつて3発の魔力で作った弾丸を撃つ。

魔力の弾丸はガジェット？型に命中し3体をスクラップにする。

ガジェットは俺に向けてビームを連射していく。

悠騎「遅いな」

放たれたビームを最小限の動きで回避しながら間合いを詰める。

悠騎「ファンタム、ブレイドフォーム」

ファンタム「Yeos」

ファンタムの銃口から魔力の刃を出しガジェット？型に突き刺す。

悠騎「ブレイドブラスト」

魔力の刃をガジェットの中で爆発させる

悠騎「ファンタム、バレットマグナム」

ファンタム「Yes」

再び弾丸を選んでカートリッジを1発ロードする

振り向きざまに1発の弾丸を撃ちガジェット？型を破壊する

悠騎「ファンタム、バレットバースト」

ファンタム「Yes」

カートリッジを3発ロードしてガジェット？型2体と？型6体が密集している所へ撃ち込む

爆！轟！

バーストバレットは？型へと命中し？型を爆発させる。

その破片によつて周りにいた？型6体と？型1体をも爆発する。

悠騎「あと2体か」

カートリッジを1発ロードし銃口から魔力の刃を出し？型の懷へ

入り

悠騎「ファントム、ブレイドバースト」

ファントム「Yeos」

更にカートリッジを2発ロードし魔力の刃を?型に突き刺し引き金を引く

暴!

魔力の刃をファントムから切り離しガジェットの中で爆発させる

悠騎「ラスト!」

左手に魔力を集め魔力変換資質で魔力を暴風へと変える。

その風を魔力によつて圧縮し膜状バリアでくるむ。

悠騎「サイクロンシューター・・・・・・・・ファイア!-!-」

荒々しき風をその中に秘めたスフィアは?型の内部へと入りその風を解放しガジェットを中から切り刻む

悠騎「よし終了。ファントムお疲れ様、クルスバリアジャケットを解除してくれ」

ファントムを指輪へと戻し服装を制服へと戻す

悠騎「戻るか」

【空間シミュレーターから出口へ向かった。】

・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・

出口へ着くと隊舎の方から歩いてくる集団がいた。

悠騎「お~いのは

歩いてくる集団に向かって手を振る

なのは「えっ!~悠騎君久しづり!~!」

なのはも手を振りながら近寄ってくる。

悠騎「なのは元気にしてたか?」

なのは「うん!~元気だよ

悠騎「そうか良かつた」

なのは「はやてちゃんが言つてた新しく来る人つて悠騎君だつたんだ」

悠騎「ああこれからよろしく」

なのは「うん頑張りうねー」

なのはと話しているとオレンジ色の髪をツインテールにした少女が話し掛けて来た

ティアナ「あーなのはたとひからのかたは?」

なのは「ああそだねそれじやあ悠騎君自己紹介して

敬礼をして

悠騎「初めまして水無森悠騎執務官です」

フォワード陣もそれぞれ敬礼をして

スバル「スターズ分隊スバル・ナカジマ一等陸士です」

ティアナ「スターズ分隊ティアナ・ランスター一等陸士です」

エリオ「ライトニング分隊エリオ・モンティエール三等陸士です」

キャロ「ライトニング分隊キャロ・ル・ルシエール三等陸士です」

悠騎「今日から事件が解決するまで六課に配属する事になつたからよろしく

「 フォワード陣、よろしくお願いします。」

「 なのは、それじゃあ午後の訓練は悠騎君との親睦をかねて模擬戦にしてよつ

「 悠騎、面白うだな」

「 なのは、それじゃあみんな準備してね」

一話（後書き）

1000以上のアクセスありがとうございます。作者の文才が余りないので面白く無いかもしませんが早く更新が出来るように頑張ります。

（六課訓練場・空間ショミレーター）

お互に300m位離れたところでバリアジャケットを着る。

なのは「悠騎君準備はいい？」

悠騎「俺は何時でもいいぜ」

なのは「それじゃあレディ・・・・・・・・」「オオー！」

悠騎「まずは様子を見るかファンタム、バレットノーマル」

ファンタム「Yess

弾丸を選択しカートリッジを1発ロードする

最初に来たのは青い帯状の魔法陣の上を駆けてくる青い髪の少女。
・・・・・スバルだ。

弾！弾！弾！弾！

ノーマルバレットを4発撃ち出す

スバルはプロテクションを張り防ぐ

悠騎「なかなか硬いな」

スバル「はあああああ」

気合いの言葉と共に右ストレートを放つ

しゃがみながら突き出された右手を持ち一本背負いの様に投げ飛ばす

更に追撃とばかりにファンタムから魔力弾を放つ。

弾！

スバルに向かっていく魔力弾はスバルの後ろからきたオレンジの魔力弾が迎撃する。

スバルの後ろには銃型のデバイスを両手に持つたオレンジ色の髪をツインテールにした少女・・・・ティアナがいた。

ティアナ「クロスファイア・・・・ショート！..」

オレンジ色の魔力弾を8発撃つてくる。

悠騎「サイクロンショーター・・・・ファイア！..」

風を秘めし魔力弾を8発撃ち出しティアナの魔力弾を撃ち落とす。

今度は後ろから槍を持った赤髪の少年・・・・エリオが突っ込んできた。

エリオ「はああああ」

振り向きながらエリオの槍を蹴り穂先をすらし避ける。

再びスバルが間合いを詰めてくる

悠騎「ファンタム、バレットマグナム」

ファンタム「Yes」

カートリッジが2発排出され強力な弾丸がスバル目掛けで向かっていく

瞬！

弾丸はすり抜け、スバルは幻のように消える

悠騎（高速移動？・・・・いや幻術か）

スバル「はあああああ

真上から帶状の魔法陣の上を駆け、右手のデバイスの歯車状のパーツを唸らせる

スバル「リボルバー キャノン！－！」

悠騎「プロテクション」

上に防御魔法を張りスバルの攻撃に備える

鈍！

鈍い音と共に俺のプロテクションにひびが入る

悠騎「バリアバースト！！」

プロテクションの表面で爆発を起こしスバルを吹き飛ばす

キヤロ「アルケミック」

エリオ「サンダー」

キヤロ・エリオ「チエーン！-！-！」

俺の後方の離れた所にエリオと桃色の髪をしたエリオと同い年位の少女・・・・・キヤロがいた

エリオとキヤロが協力して行う魔法によって四肢を電気を纏った鎖によつて拘束される

悠騎ちよつとやべんな

スバル「うおおおおおおおーーーーー！」

スバルはファンтомを蹴り飛ばす

悠騎「サイクロンシューター・・・・・・・ファイアーーー！」

追撃される前に数発の魔力弾で距離をとらせる

鎖によつて拘束され俺の前5m程の所にスバル、後ろ5m程の所

にティアナ、その後ろにエリオとキャロがいる

スバルはカートリッジをロードし左手の前に魔力スフィアを作り魔力を込めていく

スバル「ディバアイイン！！」

ティアナもカートリッジをロードし魔力を込めていく

ティアナ「ファンтом！！」

スバル「バスター！アアア！！！」

轟！

ティアナ「ブレイザアアアア！！！」

前から青い光の奔流がぶつかり辺りに白煙がたちこめる
一つの光の奔流がぶつかり辺りに白煙がたちこめる

轟！

・・・・・

・・・・・

スバル『やつたね！ティア』

ティアナ『ちびっ子達のおかげよありがと』

私達は勝つたと確信した。・・・・・・・・・・・・・

煙が晴れるまでは

悠騎「はい俺の勝ち」

ティアナ「えつ！？」

私の後ろには黒い長剣を持った悠騎さんがいた

スバルやエリオやキャロの周りには大量の剣の形をした黒い魔力
弾が取り囲んでいた

なのは「はいみんなそこまで」

なのははの号令と共に今回の模擬戦は終了した

・・・・・

・・・・・

（空間シミュレーター前）

なのは「悠騎君どうだったたちのフォワード達は？」

悠騎「個人個人の能力も凄いけど連携がスムーズでよかつたと思うよ。正直最後の砲撃の時は焦ったよ」

なのは「最後のはじりやつたの？」

悠騎「それは二二つのおかげさ」

腕につけている腕輪を見せる

悠騎「ここ二つはクルス、俺のもう一つのデバイスだ」

クルス「よろしく御願いします。」

なのは「よろしく」

なのは「悠騎君もつ一つトバイス持つてたんだ」

悠騎「ああ…………あの時は…………」

・・・・・・・・・・・・

スバル「ディバーアイン！！」

ティアナ「ファンтом！！」

スバル「バスターアアアア！－！－！」

轟！

ティアナ「ブレイザアアアア！－！－！」

前から青い光の奔流が、後ろからはオレンジの光奔流が迫ってきた

悠騎「クルス！ノーマルジャケットページ」

ジャケット表面の魔力が爆発し鎖が弾け飛ぶ

悠騎「アサルトジャケットセット、チエンジストレージ」

クルス「OKマイロードアサルトジャケットセットアップ、モード
ストレージ」「

黒いロングコートと紺のインナーが消え紅いインナーと黒いベス
トへと変わる

悠騎「クロイツバスターード」

魔力によって自分自身が隠れる程の刀身を持つた黒い大剣を一振
り作り出す

一振りの大剣を盾に前後からの光の奔流を受け止める

悠騎「クロイツブレード」

魔力で漆黒の長剣を作る

瞬！

高速移動魔法でティアナの背後へ移動し他の三人の周りに短剣
型の黒い魔力弾をセットする

悠騎「はい俺の勝ち」

・・・・・

・・・・・

悠騎「つてな感じ」

なのは「つて事は悠騎君最初から真面目にやつて無いこと一々」

なのはは睨みながら言つて寄つてくる

悠騎「ちょっと待てよ俺は真面目にやつてたよ・・・・・ただクルスを使つのはやばい時だけつて決めてるんだ」

スバル「どうしてですか？」

悠騎「こいつは魔力消費があすぎるミッターがあると長くは使えないんだ」

スバル「そうなんですか」

悠騎「しかもこいつにはカートリッジシステムは無いからな」

なのは「悠騎君、今度は隊長達と模擬戦やらない？」

悠騎「いきなりだな」

なのは「いいのー今度は最初からクルスも一緒にね」

なのはは満面の笑みで言つ

悠騎「けど隊長って言つてもお前しか居ないぞ」

フェイト「悠騎私達なら居るよ」

悠騎「えつー?」

俺が振り返るとフェイト、シグナム、ヴィータの三人がいた

悠騎「何で居るんだよ」

フェイト「なのはが来てつて」

シグナム「高町に呼ばれて」

ヴィータ「なのはに言われて」

三人は言葉は違うが同じことを言つてゐる

なのは「悠騎君と私達で模擬戦する事になつたよ」

悠騎「なつたじやねえだろ」

俺はなのはを半眼で睨む

ヴィータ「いいじやねいか

フェイト「そりやうだつよ

シグナム「早く用意しろ」

三人とも賛成する・・・若干一名いきいきとした声で
悠騎「はあ・・・分かつたやるよ」

ひつして本田一度目模擬戦が決定した

二話（後書き）

こんな駄文に3500以上のアクセスありがとうございます。

これからも面白くできるよう、早く更新できるよう頑張っていきたいです。

四話（前書き）

すみません本業（大学）が忙しかったので遅れました。

本業（大学）が忙しいので更新まで時間がかかると思います。

後書きにオリジキャラのプロフィールを載せておきます。

悠騎「はあ～何でこんな事になつたかなあ」

俺はなのは達隊長陣と模擬戦をする事になり空間シミュレーターの中でのノーマルジャケットを着ていた

クルス「まあ諦めるしか無いですよ。それに私を使うのも久し振りなのですから感覚を思い出すのにちょうどいいと思いますよ」

ブレスレット・・・・・・・・クルスは光りながら手を加減なしで行く

悠騎「まついいか。クルスやるからこその手加減なしで行くぞ」

クルス「イエス、マイローデ」

なのは「悠騎君準備はいい?」

悠騎「いいぜ」

なのは達と俺との距離は約100mをこなしてからやつこへ行く

距離だ

なのは「それじゃあティアナ合図よろしく」

ティアナ「はいレディ・・・・・・」

ティアナの合図と共にシグナム、ヴィータが接近してくる

悠騎「クルス！サイクロンシューター！」

クルス「サイクロンシューター セット」

悠騎「ファイア！！」

風を閉じ込めた魔力弾を10個ほど作り一人に向け撃ち放つ

二人が避けている間に後ろに下がり距離を取る

悠騎「さつそくで悪いがいくぜクルス！ノーマルジャケットリーラスアサルトセットチェンジストレージ」

クルス「OKマイロード。ノーマルリリースアサルトセットアップモードストレージ」

ロングコートが消え紅いインナーと黒いベストになりブレスレットがファインガーレスグローブと小さなガントレットに変わる

悠騎「顯れ舞え無限の剣達よ。ソードワールド」

クルス「Yes my lord」

辺りに大剣、長剣、短剣等様々な形の黒い魔力剣が数百本と出現する

悠騎「いくぜ！」

長剣を掴みシグナムとの距離を詰めていく

悠騎「はあああああ

シグナム「はあああああ

閃！

閃！閃！

閃！閃！閃！

閃！閃！閃！閃！

悠騎とシグナムの剣技がぶつかり合っていく

・・・・・

なのは「すっかり蚊帳の外だね」

フェイント「うん」

ヴィータ「しゃあねえ奴らだな」

三人が呆れながら話していると一人の距離があく

・・・・・

悠騎「いい加減終わらせて」

はあ・はあ・と荒くなつた息を整えながら言つ

シグナム「ああ・・・あつちの三人も暇そうだしな」

シグナムは少し余裕があるようだ

ああクルスにもカートリッジシステム付けときやよかつた

今更ながら後悔する

システム「いくぞ」

シグナムはカートリッジをロードしその愛剣に炎を纏わせる

悠騎「まだ使いたくなかったけど・・・・・集え我が剣達よ」

ソードホールドで出した剣の10本程の形がぶれ黒い光となつて集まつてくる

シグナム「紫電」

シグナムはレヴァンティンを正面に構えタイミングをはかる

悠騎「閃風」

黒き剣に烈風を纏わせ顔の横、剣先をシグナムへ向け腰をかるく落とし構える

シグナム「一つ閃！……！」

烈火を纏つた剣が脳天めがけて振り下ろされる

悠騎「一つ天！……！」

烈風を纏いし神速の突きをシグナムの腹めがけ放つ

瞬！

凄まじい風を受けシグナムは後ろのビルへと飛ばされる

悠騎とシグナムの勝敗を分けたのは・・・・・速度に特化した烈風を纏つた一点への突きと威力に特化した烈火を纏つた縦の斬撃の速さの差だった

悠騎「あと三人かあ」

悠騎はかなり疲れている

悠騎「面倒だから一人づつ一発勝負にしようぜ」

俺の魔力が残り少ないので一発勝負を持ちかける

なのは「いいよねフロイトちゃん、ヴィータちゃん

フェイト「私はいいよ」
ヴィータ「私から行くよ」
「

ヴィータが前に出る

ヴィータ「いくぞアイゼン」

ヴィータは自身のデバイスを巨大なハンマー・・・・ギガン
トフォルムにし振りあげる

悠騎「パワー勝負か」

シグナムの時に使つた剣を捨て近くに作つておいた刃渡り2m程
の大剣は手に取る

悠騎「集え我が剣たちよ」

今度は辺り約五百本の剣の形がぶれ黒い光となつて集まつてくる
荒々しき風を大剣に纏わせ構える

ヴィータ「轟天つ爆碎!!」

悠騎「暴風」

ヴィータによつて巨大なハンマーが振り下ろされる

ヴィータ「ギガントシュラアアアク!!」

俺は振り下ろされるハンマーを迎え撃つ形で大剣を振るう

悠騎「剛閃つ！！！」

轟！

二つの力が一瞬拮抗する

ヴィータ「はああああ

悠騎「烈破つ！！！」

暴！

悠騎の大剣は形を失い暴風となつてヴィータは吹き飛ばす

ヴィータとの勝負を終え残りの一人の方を向く

悠騎「魔力が保たないから最後は一人同時でいいか？」

なのは「いいよ

フェイト「私も」

二人は俺の提案を了承する

悠騎「それじゃあいくぜ！」

俺は魔力で長剣を作り左の腰へ構え精神を集中する

なのは「レイジングハート、エクシードドライブ」

フェイト「バルディシュ、サードフォーム」

なのはのデバイス・・・・・・レイジングハートは槍の様な形へ
変わる

フェイトのデバイス・・・・・・バルディシュは大剣へと形を変
える

悠騎「集え我が剣達よ」

辺りに残っていた全ての剣が黒き光となつて集まつてくる

なのは「全力全開スター・ライト」

辺りから桃色の光がレイジングハートの先に集まる

フェイト「雷光一閃プラズマサンバー」

上空からバルディシュへ雷が落ち刀身を電雷が覆う

悠騎「貫け風神ゲイルセイバー」

集まつてきた黒き光が黒き風となり剣を包む

なのは「ブレイカアアア！！」

フェイト「ブレイカアアア！！」

悠騎「スラッシャアアアーーー！」

轟！

暴！

膨大な量の魔力と魔力のぶつかり合い

お互いが相手を喰らいいくべやうとせめぎ合つ

煌！

眩い光と共に魔力の余波が辺りを覆つ

ああ・・・・模擬戦しなきや良かつた

後悔の念と共に俺の意識は暗闇に沈んでいく

四話（後書き）

水無森 悠騎
ミナモリ ユウキ

性別・男

年齢・19

利き手・両利き（元は左利き）

役職・執務官

階級・一等空佐

魔力光・黒

魔力値・SS+

魔力変換資質・疾風

魔導士ランク・空戦S+

使用魔法・特殊ミッド式（ミッド式を主体にベルカ式を混ぜた魔法）

使用デバイス・クルス、ファンтом

容姿・身長175cm細めだが見た目以上に筋肉がある。髪は黒の短髪、瞳も黒

性格・普段は冷静だけど友達や大切な人の事になると熱くなる

なのは達とは小中学校の同級生

文才の無い作者ですが温かい目で見守ってください。感想やアドバイスも受け付けているので良かったらどうぞ

目が覚めると見知らぬ天井。

あれ……」「どこのだ?

独特な薬の匂いに薬や包帯が入つてゐるだらう棚、今俺が寝ているベッド……医務室か?

シャマル「大丈夫?」

金髪のショートボブで制服の上に白衣を着た女性が話しかけてきた。

悠騎「大丈夫、ありがとう。……ところで誰が運んでくれたんだ?」

シャマル「フォワードのみんなよ」

……あこづらにもお礼言つとかないとな。と思いながら、時計を見ると五時を回っていた。

悠騎「シャマル、今からオフィスに行くが大丈夫だろ?」

シャマル「ええ、問題ないわよ」

シャマルの了承を得て医務室を出て行く。

・・・・・

．．．．．

～オフィス～

たくさんのが整然と並び多くの局員が忙しく働いている。

そのデスクの中に青い髪の少女とオレンジ色の髪の少女……スバルとティアナがいる。

悠騎「スバル、ティアナ」

俺は一人に近づき声をかける。

スバル「あつ悠騎さん大丈夫でした？」

悠騎「ありがとう大丈夫だ。……迷惑かけてすまなかつた」

ティアナ「いえ。迷惑だなんて」

ティアナは両手を小さく振りながら言つ。

悠騎「そつだライトニングの一人にもお礼を言いたいんだけど」

俺は辺りを見渡しながら言つ。

ティアナ「エリオとキャロならフェイト隊長と一緒に外回りに行つていますよ」

ティアナが教えてくれる。

悠騎「じゃあ後にするか」

俺は「じゃあな」とスバルとティアナに声をかけながら座つて
いるテスクへ向かつ。

悠騎「なのは」

近づき声をかけるが反応がない。

悠騎「なのは……なのは」

先ほどよりも大きな声で呼びかける。

なのは「あつと……」めん。びつしたの悠騎君？」

悠騎「いや……わざとまなかつた。訓練途中で氣絶しちまつて」

なのは「……」フオワードのみんなにもつて経験になつたし

悠騎「あつがとつ。なのは」

なのは「うん。」

なのはは笑顔になつてくれる。

悠騎「……とにかく、わざとまなかつたんだ? ほーつとしたみた

いだけど

なのは「あつ……あのね」の間のロストロギアの事を考へたの

なのはは笑顔から仕事をする真剣な顔へと変わった。

悠騎「ああそのロストロギアの事か。形状が剣つて事位しかまだわかつて無いからな」

……そつまだロストロギアの事は殆どわかつて無い状況だ。

なのは「うん……今回の件にもレリックが関わってるから私……心配で」

なのはは悲しそうな顔になる。

今回の事件にも……そつ約半年前にあつた事件……ジェイル・スカリエツティ一味によるミッド地上本部襲撃その後にあつた大規模テロにもレリックと言う名のロストロギアが関わっていた。

悠騎「大丈夫だよなのは。何のために俺がいると思つてんだ?」

俺は笑顔を見せる。

なのは「ありがとう。悠騎君」

なのはも笑顔になつてくれた。

それじゃ俺も仕事に戻るよ。と言つて新たに増設された俺のデスクへ向かう。

……さて今日の仕事はつと前の事件の報告書を完成させて、今回の事件の報告書に目を通す位かな。

悠騎「クルス、報告書を仕上げてくれ」

クルス「イエス、マイロード」

クルスに前の報告書の方を任せ、今回の報告書を見る。

……管理外世界「レセプティー」にてレリックと正体不明のロストロギアを発見し回収にスターズ分隊が向かいレリックを封印、ロストロギアは封印出来ずレリックだけ先にスターズ03、04に回収させようとしたが謎の人物によつて奪取された。ロストロギアの方もスターズ01が回収作業中に襲撃され奪取された。……つて所か、それなら今は襲撃者の正体とロストロギアの正体を調べてみるしかないか。

後でユーノに頼んでみるか。

クルス「マイロード報告書の仕上げ終了しました」

悠騎「ありがとう。じゃあそれ送つといてくれ

クルス「イエスマイロード」

クルスに報告書を送つてもらい仕事は一段落した

休憩とユーノへ調査依頼を兼ねて屋上に行くとしょ。

・・・・・

「屋上」

六課の屋上にはみんなが出撃の時などに使う一機のヘリがある。

海沿いの六課隊舎の屋上から観る景色はとても綺麗だ。

悠騎「クルス、ユーノに回線つないでくれ」

クルス「イエスマイロード」

クルスがユーノに回線を繋いでくれた。

悠騎「久し振りだなユーノ」

ユーノ「うん。久し振りだね悠騎」

悠騎「早速ですまないが調べてもらいたい物があるんだ」

悠騎「今から送るロストロギアについて調べてくれ

そう言つてクルスにロストロギアの写真と今わかっている情報を送つてもらつた。

ユーノ「わかつた。調べてみるね」

悠騎「忙しいだらうが頼むよ」

ユーノ「任せて。解つたら連絡するよ」

悠騎「ありがとう。ユーノ」

それから少しの間雑談をしてオフィスへ戻った。

それから帰つていたエリオとキャロ、フェイドにお礼を言つて書類をまとめて六課の隊員寮へと向かう。

（隊員寮）

はやてに聞いていた部屋へとはいる。

やつぱり殺風景だな。……そこにはベッドやテーブル等生活に必要なものと宅配便で送つた俺の荷物しかなかつた。
まあ仕方ないか。そう思いながらまづ荷物をばらす。

二十分程で荷物の整理を終えた。

悠騎「今日やつと寝るか

やつと思つと風呂へは入り」の口は就寝した。

五話（後書き）

遅くなつて申し訳ありません。これからも更新が遅くなるかもしれません
が頑張つて書くので温かい田で見守つてください。

俺が六課へ出向して一週間がたつた。ユーノからの連絡まだこじみたな事件が起きる気配もなく、フォアード陣の模擬戦の相手をしている。

～ 食堂 ～

今は午後の訓練が終わり俺とのは、ヴィータ、フォアードの四人と一匹で夕食を食べている。

悠騎「本当にスバルとエリオはよく食べるなあ」

エリオ「そうですか？」

スバル「これ位普通ですよ

二人はそう言つが普通の男性が食べる量の数倍は食べている。

ティアナ「二人は何時ものことですよ

キヤロ「悠騎さんはそんなに食べないんですね」

悠騎「そつかあ？」

人間つて慣れると恐ろしいなあ。つと思いながら普通なら多いと思われる量が入った皿から料理を口へと運ぶ。

その後、談笑を交えながらの夕食は終わり。オフシフトのフォアード陣は隊員寮へ帰り、なのはどヴィータの一人は残った仕事をするためオフィスへ行つた。

・・・・・

俺は今一人で空間シミュレーターの中にいる。

周りは何もない荒野にある。

その中でいつもの様に魔力を圧縮し剣を造り出す。

それは悠騎自身の身体さえ隠してしまった大きな刃を持つ大剣。

手にずつしりとした重さを感じながら正眼に構える。

袈裟斬り。

踏み込んで横の一閃。

重い大剣に重心を狂わされるのを修正しながら縦の一撃。

逆袈裟斬り。

突き。

斬り上げ。

その大剣は空間を引きちぎっていく。

自分の中では敵をイメージする。

イメージした敵に斬閃を重ねる。

更に様々な構えから斬撃を行つ。

はつ！

気合いで言葉と共に突きを放つ。

一瞬の残心の形から大剣を分解。

その魔力を使い今度は長剣を造り出す。

袈裟斬り。

突き。

斬り上げ。

今度は空間を引きちぎるのではなく空間を斬り裂いてゆく。

十五分程剣を振り続けイメージの中で倒した敵の山を作つた。

ふう……つと息を吐きながら残心を解く。

悠騎「今日は終わるか。クルス、シユミレーターを閉じてくれ」

クルス「了解しました」

クルスの返事と共に荒野が消えただの無機質な空間に戻る。

出口へ向かうとそこにはスバルがいた。

・・・・・

スバル「ティア、ちょっと走つてくるね」

ティアナ「そうなの?」

スバル「うん。そのへん軽く回つてくるね」

ティアナ「そう」

ティアを部屋に残して私は走りに行く。

・・・・・

二十分位走つていつも訓練している空間シユミレーター近くに通

りかかった。

スバル「あつ空間シユミレーターがついてる」

誰が使ってるんだろ?」

悠騎「スバル、一人でランニングか?」

スバル「あつ……はい少しだけ」

悠騎「そうか」

スバル「悠騎さんもお一人でトレーニングですか?」

悠騎「ああ少しな。スバルはまだ走るか?」

スバル「いえ、もうあがります」

悠騎「飲み物いる?」

スバル「はい」

悠騎「はい、どうぞ」

悠騎さんが近くの自販機からスポーツドリンクを買ってきてくれた。

スバル「ありがとうございます」

3月末の夜風は走つて温まつた体でも少し寒つた。

スバル「悠騎さんってなのはさん達といつお友達になつたんですか？」

悠騎「小学校から一緒に初め喋つたのは14歳の頃かな。その頃ちょっと塞ぎ込んで、なのは達が話しかけてくれたからその時は立ち直れたんだ」

スバル「そなんですか」

悠騎「ああ……。スバルは何年か前にあつた空港火災の時にはが助けたんだつたよな」

スバル「はい。その時のなのはさん憧れて今の仕事を選んだんだ

悠騎「そつか……。お互いなのはおかげで今があるだな」

スバル「はい！」

悠騎さんはなんだかちょっと嬉しそうだった。

悠騎「そろそろ寮に戻るか」

スバル「はい」

私達は寮へ帰つた。

なのは「はーい。今日の早朝訓練はここまで」

一同「ありがとうございます。」

ボロボロになつながら早朝訓練を終えた。

なのは「みんな朝ご飯しつかり食べてちやんと休んでね」

一同「はーい。」

～ 食堂～

悠騎「おはよー。今日も朝からボロボロだな」

なのは「おはよー。悠騎君」

一同「おはよー。」

フオアード陣は朝練後なので流石にきつやつだ。

なのは「悠騎君、今日の午後に模擬戦するんだけど入れる？」

悠騎「いめんのは。午後はコートの所に行くんだ」

なのは「やうなの？」

悠騎「ああ。ロストロギアの事を調べてない」

なのは「せつかあ」

「ちょっと残念そうだった。

その後30分くらい雑談しながらの食事を楽しんだ。

・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・

ピヤー・・・・・ピヤー・・・・・ピヤー・・・

スバル「警報？」

辺りに響き渡っているのは第一種警報。それによアートの文字も浮かび上がる。

なのは「せめてやん。」

なのはせめてを通信で呼ぶ。

「ホイント」なのは、この警報は？

「うじつも合流する。

悠騎「せめて、この警報は何なんだ？」

はやて「みんな、今レリックの反応が出たんや」

悠騎「どこにだ？」

はやて「第56無人世界「メクシルス」に2つと第43無人世界「レイテンティス」に1つや」

はやても少し焦つている。

フェイト「3つも？」

フォアード陣だけでなくなのはやフェイトも驚いている。

はやて「スターズ分隊とスカイ01は「メクシルス」にライトニング分隊は「レイテンティス」へ。この前の人達も向かってるかも知れんから気い付けてな」

悠騎「了解」

俺は軽く手を挙げ転送ポートへ行く。

なのは達も返事をして転送ポートへ向かう。

「の時、俺は再会するとは思つてなかつた。

俺となのは達との出会つた切っ掛けであり、大切な人を失つた事
件の被害者に。

六話（後書き）

ファンтом

ストレージデバイス

AIは無いが音声対応システムはある

待機時は銀の指輪

ミッド式カートリッジシステム、マガジン式10発
形はワルサーP99で色は銃身が黒でグリップが赤
ガンモード・射撃魔法に特化したモード

クルス

ストレージ兼インテリジェントデバイス

待機モードは無い

AIは執事口調の男

ストレージデバイスとインテリジェントデバイスの二つのモードあるデバイス

インテリジェント時は両手にブレスレットとしてつけている。データ関係や探索系魔法や通信を担当する。

ストレージ時はAIが最低限になつて高速処理が出来ようになる。
手の甲に銀の十字が入つたフィンガーレスグローブと一本の剣が交
差する様に描かれた小さな籠手になり戦闘をサポートする。

デバイスを載せます。

更新が遅くなつてすみません。

学校の授業や部活で更新が遅くなると思いますが絶対に完結をせるので応援よろしくお願いします。

感想・アドバイス・誤字脱字など受け付けているのでよかつたらどうぞ。

第56無人世界「メクシルス」

そこは草原が広がる世界である。昔は文明あつたようで遺跡があるが人は住んで居らず無人の世界となつていて。

悠騎「こちらスカイ01。ロングアーチ、メクシルスに着いた。レリックの場所は特定できたか?」

アルト「こちらロングアーチ。スカイ01へ、レリックは二つともそこから南へ50km程行つた所にある遺跡の中です」

なのは「スターズ分隊、了解」

悠騎「スカイ01、了解」

俺は地図を表示し確かめる。

ヴータ「ここから距離があるな」

悠騎「確かティアナとスバルは飛べなかつたよな」

スバルとティアナの方へ尋ねる。

スバル「私はウイングロードがあるからついて行けると思いますけど」

ティアナ「私は……飛べ無いです」

ティアナは俯きながら答える。

悠騎「しゃあない俺が先行する。みんなは後からきてくれ。なのは、
ティアナを頼む」

なのは「うん！悠騎君気を付けてね」

ヴータ「私も急ぐよ」

ティアナ「すみません」

悠騎「気にすんなよ」

俺そつと飛行魔法を発動し飛ぶ。

なのは「私達も行こ」

ティアナ「はい！」

スバル「はい！」

ヴータ「おう！」

・・・・・・・・・・

第43無人世界「レイテンティス」

そこはほんとジャングルに覆われ多種多様な生き物が生息する動物の楽園の様な世界だ。

フェイト「こちらライトニング01。ロングアーチ、レイテンティスに着いたよ。レリックの場所は？」

私は音声通信をしながら地図を出す。

シャーリー「こちらロングアーチ。レリック反応はそこから南東へ30km程行った所にある大樹の中です」

フェイト「了解！」

シグナム「私が先頭で行こう」

フェイト「エリオとキャロは真ん中で」

エリオ「はい！」
キャロ「はい！」

フェイト「それじゃ行くよ

私の合図と共に私とシグナムは飛行魔法でエリオとキャロはフリードで飛び立つ。

・・・・・・・・・・・・

メクシルス

俺がなのは達と別れ35分が過ぎ眼下には雄大な草原が広がる。

先程から巨大な遺跡が目に入つてくる。

悠騎「クルス、異常は無いか?」

クルス「今の所、生体反応も魔力反応ありません」

悠騎「そうか……」

余りにも静かすぎる。何も無いに越したことはないが……。一抹の不安を感じながらスピードを上げていく。

・・・・・・・・・・

更に5分程飛び続け遺跡へとたどり着く。

悠騎「こちぢりスカイ01。ロングアーチ、遺跡に着いた。レリックは何処だ?」

「…………」

悠騎「ロングアーチ、応答しろ」

「…………」

クルス「マイロード、通信妨害確認。生体反応及び魔力反応を確認しました」

ちつ……。

クルスの報告を聞きながら舌打ちをする。

悠騎「ファンタム、ガンフォーム。クルス、レリックの場所を探索してくれ」

俺は右手の指輪を拳銃に変える

クルス「イエス、マイロード」

さて、恐らく敵はオーバーSでこちぢりスカイ+か……。

クルス「マイロード。左、魔力弾数30来ます」

クルスの言葉に反応し左を見ると30個程のダークレッド色の魔力弾が向かってくる。

悠騎「サイクロンシューター……ファイア！！」

風を秘めし魔力弾を数個作り撃ち出す。

俺の魔力弾は向かってくる魔力弾と衝突し。

暴！

暴！

暴！

暴！

暴！

中にある風を解放し鎌鼬よつて周りも迎撃していくが。

クルス「マイロード。撃ち漏らしがあります」

まだ、5個程の魔力弾が向かってくる。

悠騎「クルス、クロスシューターで迎撃しろ」

クルス「クロスシューター、セット」

クルスは短剣型の魔力弾を数個に作り出し。

クルス「ファイア」

撃ち出す。

クルスが撃ち出した魔力弾は狙い違わず残りの魔力弾を破壊する。

？？？「よく我的攻撃を防いだな」

酷く冷たい声のした方を見るとそこには白いローブを身に纏つた人が立っていた。

……やつぱりこの前なのは達が会つた奴か。

悠騎「お前、何者だ？」

？？？「人に名を聞くときは自分から名乗るのが礼儀だろ？」

悠騎「そうだな。俺は時空管理局機動六課所属、水無森悠騎一等空佐だ」

？？？「我が名はノワール。冥府の王だ」

白いローブの男はノワールと名乗る。

悠騎「顔は見せてくれないのか？」

ノワール「見せる気はないな」

悠騎「そつかよ。なら力ずくでも見せて貰い」

ファンтомの弾丸を選びカートリッジをロード。更に左手に魔力の剣を作り出す。

ノワール「力で来るか……。よから」

ノワールも剣型ロストロギアを取り出し左手で構える。

悠騎「いくぜ」

ノワール「来い」

二人の剣がぶつかり合う。

・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・
・・・・・

レイテンテイス

悠騎がノワールと剣を交えようとしていた時、フェイト達ライトニング分隊は大樹へと到着しレリックを捜索していた。

大樹はとても巨大だったがキャロとケリュケイオンの活躍によりかなり早く位置特定が成功した。

エリオ「レリックありました」

フェイト「キヤロ封印お願い」

キヤロ「分かりました」

キヤロが封印を終える。

フェイト「こちらライトニング・レリックの確保封印処理、完了しました。」これより帰還します

シャーリー「こちらロングアーチ了解。」

フェイトがロングアーチへ報告し帰還する。

ケリュケイオン「魔力反応確認、こちらへ向かってきます。」

ケリュケイオンが光りながら報告を告げる。

みんな突然の情報に気を引き締める。

そこへ現れたのは藍色のロープを着た男だ。

フェイト「あなたは何者?」

フェイトはロープの男へ問い合わせる。

??「我が名はタナトス」

「フュイト、あなたの目的は何？」

タナトス「お前達が持っているレリックを奪うことだ」

タナトスは低い声で言つ。

シグナム「渡すと思つていいのか」

シグナムはレヴァンティンを構える。

タナトス「言つたはずだ奪つと」

タナトスは拳を構えながら静かに低い声で言つ。

その声が開戦を告げた。

更新が遅くてすみません。

可能な限り速くするので応援よろしくお願いします。

感想やアドバイス等受け付けていたのよかつたら書いてください。

待っています。

メクシルス

悠騎がノワールと戦い始めた時、なのは達スターズ分隊は遺跡まで約10kmの場所を飛んでいた。

なのは「こちらスターズ01。ロングアーチ、あと10分位で遺跡に到着します。」

アルト「こちらロングアーチ。先程からスカイ01との通信が繋がりません。更に遺跡付近で推定Sランクの魔力反応を確認しました。」

なのは「えっ！分かりました。こちらも急ぎます。」

アルト「お願いします。」

悠騎君……無茶しないで。

・・・・・・・・

眼下に遺跡を見下ろす天空に漆黒と闇紅の軌跡が描かれる。

悠騎「裂風一閃！！」

片手でノワールに荒々しき風を纏いし斬撃を放つ。

ノワール「ふつ」

ノワールはその斬撃を軽々と受け止める。

ノワール「モルテシューター」

ノワールの周りに10個の魔力弾が形成されていく。

やばい……

クルス「ブリッツアクション、クロスシューターセット」

クルスが判断し後ろへと高速移動魔法を発動してくれる。

ノワール「行け」

ノワールは魔力弾を放つてくる。

クルス「ファイアー！」

ノワールとクルスが放ったシューターがぶつかり相殺しあい煙が巻き起こる。

ノワール「亡牙つ」

ノワールが煙の中から飛び出し自身の剣を振りかぶる。

ノワール「一閃」

膨大な魔力が込められた斬撃が悠騎に迫る。

斬！

悠騎「ちつ……」

激！

咄嗟に魔力剣の硬度を上げ受け止める。

ノワール「吹き飛べ」

言葉と共に地上へと飛ばされる。

くそつ……

クルス「フローターフィールド」

地上に激突寸前、クルスが緩和用の魔法を展開してくれた。

悠騎「ありがとう、クルス」

クルス「いえ」

悠騎「カートリッジはファントムの中のマガジンに5個と10個入

リマガジンが一つ、計15個か……」

少なくはないが楽観視できない。

クルス「今は退いてスターズの皆さんと合流しましょう」

クルスは戦略的撤退を提案していく。

悠騎「ダメだ。今退いても奴がその場に留まってくれるとは限らない」

クルス「しかし……」

悠騎「それに奴の顔も見てないし名前も本名じゃ無いかも知れない。今、レリック持つて行かれたらまた後手に回らなきゃ行かなくなる」

クルス「そうですが……」

それに……身体が万全の状態じゃないのは達を出来れば戦わせたくない。

悠騎「最悪一撃与えて奴の正体を見る。そして、俺が戦ってる間になのは達にレリックを確保して貰うしかない」

クルス「けど……スターズの皆さんが何時来るか解りませんよ」

悠騎「大丈夫だ。なのは達はすぐ来る。俺は信じてるから」

再び魔力剣に魔力を追加し硬度を高める。

クルス「分かりました。私も全力でサポートします」

クルスは力強い言葉で返す。

飛行魔法を使いノワールの居る高度まで戻る。

ノワール「話は終わったか？」

ノワール「ああ……。待つてくれてありがとうございます」

ノワール「いや……今から死に逝く者に最後の言葉くらい遺せせてやるうと思ってな」

悠騎「残念だけど俺は今死ぬ気はない」

ノワール「そうか……」

ノワールは剣を構えながら呟く。

ノワール「行くぞ」

悠騎「来い！」

ノワールは剣を構えたまま突っ込んでくる。

悠騎「クルス！」

クルス「ブリッツアクション！」

ノワールとの距離を取る。

ノワール「モルテシューター」

ノワールは自身の目の前に20個程の魔力弾を作り出す。

悠騎「ファンタム、バレットソニック」

ファンタム「Yes」

悠騎「クルス、弾道予測を」

クルス「イエス、マイロード」

右目の前に小型のスクリーンを展開させ、クルスから送られてくる弾道予測と勘を頼りに魔力弾を迎撃していく。

悠騎「ファンタム、マガジンの中のカートリッジを全部ロードしろ。クルス、バリアジャケットノーマルリリースアサルトセット。風迅を使う」

ファンタム「Yes」

クルス「イエス、マイロード。ノーマルリリースアサルトセット」

黒いロングコートと紺のインナーが消え紅いインナーと黒いベストへと変わる。

ファンタムが5個のカートリッジロードを終えマガジンを入れかかる。

カートリッジ内の大量の魔力が悠騎へと流れる。

悠騎「使つのは久し振りだが……行くぜーーー！」

轟！……轟！……轟！……轟！

大量の魔力が次第に消えてゆき代わりに凄まじい風が悠騎を取り巻いていく。

吹き荒んでいた風は悠騎の両手、両足、胴へと圧縮されてゆく。

普通なら目視は出来ないはずの風が魔力によつて圧縮され魔力を巻き込む事で黒い風となり目視出来るようになる。

それは黒き鎧。

暴風の鎧。

悠騎「クルス！」

クルス「ブリッツアクション」

三度目の加速、今度は後ろではなく前へ……ノワールへ向かう。

悠騎「風迅・裂風一閃！」

先程の斬撃を越える風を伴い、遙かに速く重い斬撃を放つ。

ノワール「ぐつ……」

ノワールは再び剣で防ぐが少し顔を歪ませる。

悠騎「烈つ破！」

魔力剣の風を解放しノワールを吹き飛ばす。

悠騎「ファンタム、ブレイドフォーム」

ファンタム「Yess」

ファンタムの銃口から魔力刃が形成される。

悠騎「風迅・裂風双閃つ！」

魔力刃の形成と同時に近づき、一つの刃を左右から振るつ。

ノワール「ちつ……」

魔力剣はノワールの持つ剣によつて、ファンタムの刃はベルカ式魔法陣を模した小型のシールドで防がれる。

ミシッ

ノワール「調子に乗るな」

ノワールは一つの刃を押し返し自分の剣を上段から一気に振り下ろす。

悠騎「くつ……」

悠騎は魔力剣とファンтомの刃を交差させ受け止める。

ミシッ……ミシッ

クルス「ブリッツアクション」

間合いをあける。

ノワールは再び上段に振り上げ。

ノワール「モルテツアンナ」

振り下ろすと同時に剣を介して魔力を撃ち放つ。

高圧縮された魔力の塊が悠騎へ突き進む。

悠騎はファンтомの引き金を引き魔力刃を魔力の塊へ撃ち出す。

ノワールのモルテツアンナと悠騎の魔力刃は互いを喰らいながら霧散していく。

悠騎「ファンтом、カートリッジ5個ロードしり」

再び魔力が風へと変換、圧縮され悠騎の体を包む。

カートリッジは残り5個

分かつていたはずの魔力消費の早さに焦りを感じつつ次の一手の為に考えを巡らす。

出来れば風迅の消費が少ないミドルかロングレンジでやりたいけど。

風迅……それは魔法と言つより魔力操作技術の応用に近い。

魔力変換資質によつて生み出した風を魔力で圧縮して鎧の様に身に纏うそれが風迅。

その風を剣に移動させる」と斬撃の強化や足に集め一気に解放したり、一定量を持続的に解放することで瞬間的又は恒常的な速度強化が可能だ。

だが、解放した風を再度魔力で圧縮せることは難しく、烈破や魔力刃にのせて撃ち出せばあつといつ間に風は無くなつてしまつ。

コリッターが有るこの状態で風を出し惜しみすればすぐに負けるだろ。

ノワール「そう何度も考へる時間はやうんぞ」

後ろから静かな怒氣がこもつた声がする。

しまつた……。

どうやって中距離で戦つか、それを考へていた隙に斬り殺されたんじゃ洒落になら無い。

声の方へ顔を向けたときにはノワールは上段の構えから剣を振り下ろし始めている。

……ヤバい。

クルス「ラウンドシールド」

ノワールの剣と悠騎の間にシールド式の魔法陣が現れ、剣の殺意を遮る。

振り返り、シールドに手を添え叫ぶ。

悠騎「シールドノヴァ」

魔法陣を形成する魔力を暴れさせ、ノワールとの距離を取る。

悠騎「すまない、今日は助けられ放しだな。」

ノワールから視線を外さずに愛機へ呴く。

クルス「いえ、貴方を全力でサポートするのが私の務めですから」

……本当にありがとう。

愛機に心から感謝しながら、再度銃と剣を握る手に力を込める。

八話（後書き）

遅くなつてすいませんでした。

大学が忙しくなつてしているのでこの位の更新速度になると思いますが
頑張るので応援よろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0929j/>

魔法少女リリカルなのはstrikers～黒き風を纏いし者～
2011年10月9日20時11分発行